

定理五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九

定理五一

最後に、人間の本性がこうしたものであること、その判断が不安定なものであること、さらにはしばしば自己の感情のみによって物事を判断すること、また喜びあるいは悲しみをもたらすものと信じてその故にそれを実現あるいは排除しようと努める事物が、往々にして単なる想像にすぎない事

同じ人への感情が、自分や相手のコンディションによって変化する不安定さ、そしてそれを何とかしようとするやり方が単なる想像にすぎない事

後悔とは原因としての自己自身の観念を伴った悲しみであり、自己満足とは原因としての自己自身の観念を伴った喜びである。そしてこれらの感情は人間が自らを自由であると信ずるが故にきわめて強烈である

ここでいう自由とは、自己自身を原因とみなす度合いが大きいという意味合いなのか？

定理五二

我々が以前に決して見なかつたような特殊な点をある対象の中に表象することを仮定するなら、それは精神がその対象を観想する間にその対象の観想から気をそらされうるような他のものを何ら自らの中に有しないというのにほかならぬ。

それが単独で精神の中にある限り、驚異と呼ばれる。(驚異…不思議で驚くべきこと)

我々の驚異するものがある人間の聰明、勤勉その他これに類する事柄であるとしたら、それによって我々はこの人間が我々をはるかに凌駕する事を観想しているのだから、その驚異は尊敬と呼ばれる。

驚異あるいは尊敬と結合したこの愛を我々は帰依と呼ぶ。(帰依…優れたものを頼みとしてその力にすがること)

感情の名称は、感情に関する正確な認識に基づくというよりも、日常の用途に基づいて作られているということである。

驚異に対立するものは軽蔑である。(軽蔑…馬鹿にすること、軽んじさせすこと)

対象の中に存するものよりも対象の中に存じないものについてより多く思惟するように決定される事になるのである。

尊敬が聰明への驚異から生じるように、侮蔑は愚鈍への軽蔑から生ずる。

見たこともないような特殊な点を持つ人に驚き

精神から離れない

尊敬やあこがれに認定される

対して、驚異と思いやそうではなかった場合の軽蔑認定
精神に根づく存在としてはこの両極端の認定者
そして忘れてはいけないのが、その認定基準は、自己自身の観念と単なる想像にすぎず、勝手に作り上げた妄想
だが、我々に中ではまぎれもなく真実だと思い込んでいる…ということか

定理五三

精神は自己自身ならびに自己の活動能力を観想するときに喜びを感じる
(観想…自己の心情の真の姿をとらえようと、心をしづめて深く思ふこと)

人間は自己の身体の変状ならびにその変状の観念を通してのみ自己自身を認識する
ゆえに精神が自己自身を観想しうるということが起こるならば、まさにそのことによって精神はより大なる完全性に移行するものと想定される
言いかえれば喜びに刺激されるものとして想定される

この喜びは人間がより多く他人から称賛されることを表象するにしたがってますます強められる
彼自身は彼自身の観念を伴ったそれだけ大なる喜びに刺激される

自己自身を観想するときに喜びを感じる。身体の変状やその観念を通してのみ自己自身を認識する。根本からの変化ということか。
この喜びは、物をもらってうれしいとか美味しいものを食べて、楽しい場所に行った時、好きなことをしたときの喜びよりも深い喜びに感じる。ただ書いてみて、今あげたものも突き詰めると自己の存在を認識できることに繋がるので、繋がってはいるのか。人から褒められたり称賛されることを表象するにしたがってますます強くなるということは、それらは自己の存在理由をより観想させるスパイス的役割になるのか。

定理五四

精神は自己の活動能力を定立することのみを表象しようと努める

精神の努力ないし能力は精神の本質その物である

ところが精神の本質は精神が有るところのもの、できるところのみを肯定し、精神が有らぬところのもの、できぬところのものを肯定しない
したがって精神は自己の活動能力を肯定ないし定立することのみを表象しようと努める

定理五五

精神は自己の無能力を表象するとき、まさにそのことによって悲しみを感じる

この悲しみは人間が他人から非難されることを表象する場合にますます強められる
我々の弱小の観念を伴ったこの悲しみは謙遜と呼ばれる
我々自身を観想することから生ずる喜びは自己愛または自己満足と称される

この喜びは人間が自己の徳あるいは自分の活動能力を観想するたびに繰り返されるから、好んで自分の業績を語ったり、自分の身体や精神の力を誇示したりすることになり、このため相互に不快を感じあうことになる。

人間は本質上ねたみ深いということ、すなわち自分と同等の者の弱小を喜び、反対に自分と同等の者の徳を悲しむということになる

ゆえに各人は自己自身を観想するにあたって、他人に認めないあることを自己の中に観想するときに最も喜ぶであろう

また反対に自分の活動が他人の活動と比較してより弱小であることを表象するときには悲しむであろう

人間は本性上憎しみおよびねたみに傾いていることが明らかである

親はその子を単に名誉およびねたみの拍車によって徳へ駆るのを常とする

何人も自分と同等でないものをその徳のゆえにねたみはしない

ねたみは憎しみそのものである

あるいは悲しみである

言いかえれば人間の活動能力あるいは努力を阻害する感情である

ところが人間は与えられた自己の本性から生じうることのみをなそうと努めかつ欲する

ゆえに人間は他人の本性に特有であって自己の本性に無関係なような活動能力、あるいは徳を自分に与えられることを欲しないであろう。

これに反して自分と同じ本性を有すると認められる同等の者に対してはねたむであろう

我々はある人の聰明、強さなどを驚嘆するためにその人を尊敬するといった場合、そのことはそれらの徳がその人に特有であって我々の本性に共通したものでないことを我々が表象するゆえに起こるのである。したがって我々はその人をそれらの徳のゆえにねたみはしないであろう。あたかも樹木をその高きがゆえに、また獅子をその強さがゆえにねたまないと同様に。

生きていくうえで出来れば悲しみは避けたい

喜んで前向きに生きていきたい

この想いから感情に素直に行くと、人から非難されないようにちゃんとしようと頑張る

認められて称賛されるように頑張る

馬鹿にされないようにがんばる

その中で、人をねたむという感情が続出する

ねたまれるという事も出てくる

そこでねたまれないように、前に出ないようにするか、開き直って突出していくか

しかしねたむという事自体が憎しみ、悲しみなのだとしたら、自分を抑えたり、頑張りすぎたりするよりも、他人と同等でない(自己自身は他の誰とも一致しない別物)という意識を持っていればとても楽な様に思った。

定理五六

喜び、悲しみ、および欲望にはしたがってまたそれからされた合成されたすべての感情(例えば心情の動搖のごとき)、あるいはそれから導き出されたすべての感情(例えば愛、憎しみ、希望、恐怖など)には、我々を刺激する対象の種類だけ多くの種類がある。

それらの感情は受動である

我々は非妥当な観念を有する限りにおいて必然的に働きを受け、またそうした観念を有する限りにおいてのみ働きを受ける

我々の身体の本性および外部の物体の本性を含む刺激を受ける限りにおいてのみ必然的に働きを受ける。

喜び、悲しみ、愛、憎しみなどには我々を刺激する対象の種類だけ多くの種類が必然的に存する

欲望は…その本質ないし本性その物である

欲望には喜び、悲しみ、愛などの種類だけ多くの、したがってまた我々を刺激する対象の種類だけ多くの種類が存する

中でも特に著しいのは美味欲、飲酒欲、情欲、貪欲、および名誉欲である

美食、飲酒、性行、富および名誉への過度な愛もしくは欲望

なおこれらの感情は…反対感情を有しない

節制、禁酒、貞操、は感情あるいは受動ではなくてそれらの感情を制御する精神の能力を表示するもの

定理五七

すべての感情は欲望、喜び、悲しみに関係する

欲望は各人の本質ないし本質その物である

ゆえに各個人の欲望は他の個人の欲望と、ちょうど一方の人間の本質ないし本質が他方の人間の本質と異なるだけ相違している

喜びと悲しみは受動である

ところが我々は自己の有に固執しようとする努力を衝動ないし欲望と解する

したがって各人の喜びあるいは悲しみは他人の喜びあるいは悲しみと、やはりちょうど一方の人間の本質ないし本質が他方の人間の本質と異なるだけ相違する

各自が満足しているこの生およびこの楽しみはその個体の観念あるいは悲しみ精神に他ならない

したがってある個体の楽しみは他の個体の楽しみとちょうど一方の本質が他方の本質と異なるだけ本性上相違している